

## 《紹介》

佐々木高明編  
『農耕の技術と文化』

飯島 茂\*

この本は、国立民族学博物館における、1988年（昭和63年）から3年間にわたっておこなわれた共同研究（代表者、佐々木高明教授）「農耕と牧畜社会の生活様式の比較民族学的研究—用具から象徴論まで」の成果である。また、同時に、この共同プロジェクトの主宰者である佐々木教授の定年退官記念論文集となる予定であったという。

しかしながら、佐々木教授が1993年4月に、国立民族学博物館の館長に就任されたため、本来の目的とは若干異なる性格の出版物になったのである。とはいえ、この種の研究の、戦後日本におけるバイオニアの一人である同教授にとっては、国立民族学博物館において主宰する最後の共同研究を飾る論文集であることは間違いない。

農耕文化史に関心をもっている者としては、30人の執筆者の手になる693ページにわたる大巻の書を手にとると、この分野の研究の質的、ならびに量的発展には、深い感慨を禁じえない。そしてまた、国立民族学博物館ならびにその周辺に集まった人材の層の厚さには、目を見張るものがある。

この本の基礎になった共同研究に参加し、執筆した研究者と、その研究内容については、紙面の関係ですべてにわたって詳細に説明をすることができないので、まず本書

の目次について紹介することにしよう。

### 目次

まえがき	佐々木高明
第一部 農耕と牧畜の諸形態	
第一章 種子農耕をめぐる諸問題	
稲作文化とは何か	佐々木高明
マレー型稲作の西遷	田中耕司
ニジェール川内陸デルタの稲作	応地利明
アイヌにおける雑穀栽培とその社会的役割	大塚和義
スペルタコムギの収穫法をめぐる	
って	阪本寧男
第二章 根栽農耕の多様性	
パメンダ高地のグラスファロー・システム	端 信行
三つのサゴデンブンプ採取民	吉田集而
中央アンデスの根栽農耕	山本紀夫
エチオピアにおける根栽類の呼称の分類とその史的考察	福井勝義
第三章 家畜飼育とその周辺	
母子関係介入をめぐるモンゴルの生態	小長谷有紀
チベットの牧畜	松原正毅
中央アンデス高地の牧畜	稲村哲也
ブータンにおける農業と牧畜	栗田靖之
ニューギニアにおけるブタ	秋道智彌
ニワトリとブタ	佐原 眞
第二部 農耕をめぐる技術と文化	
第四章 用具論の試み	
踏鋤の諸形態と系譜	氏家 等
岐阜県東部における人力犁の使	

\*いいじま しげる、桜美林大学

用法	近藤雅樹
タイの稲刈鎌	堀尾尚志
現代の【天工開物】の世界	周 達生
西ネパールの木器	坪内英彦
第五章 農耕の生態	
オーストラリア・アボリジニの	
萌芽的農耕の要素	松山利夫
オリーブ栽培の起源と発展	安田喜憲
最後の焼畑	庄司博英
ネパール・ヒマラヤのコモン・	
フィールド・システム	小林 茂
空間占拠と開拓	金田章裕
近世後期における排水・乾田化	
と馬耕の導入	久武哲也
第六章 農耕をめぐる儀礼	
稲魂（クワン・カオ）の行方	
	田辺繁治
森林の変容と生成	林 行夫
ルングス族の儀礼と法	宮本 勝
あとがき	端 信行

以上のように、本書の内容は、日本をはじめとするアジア、オセアニア、ラテン・アメリカ、アフリカ、ヨーロッパなど、世界諸地域を包含し、その専門分野も、民族学、文化人類学、地理学、農学、考古学、民俗学、生態学など多岐にわたっている。

前述のように、本書が取扱っている専門分野も、地域も広汎にわたり、きわめて多様なため、それぞれの論文の内容について言及する能力を評者は持ち合せていないし、紙面の余裕も十分ではない。そこで、ここでは、編集者である佐々木教授の巻頭論文“稲作文化とは何か”ならびに、評者の専門分野に近いチベット・ヒマラヤ関係の諸論文について触れることにより、この大卷

の書の性格の一端を紹介することにする。  
 まず、佐々木教授の巻頭論文“稲作文化とは何か”について述べることにしよう。その論文はこれまでの佐々木教授の研究の主要な部分をなしているだけに、短編ながら、内容はきわめて濃厚である。

本論文のタイトルである“稲作文化とは何か”というテーマは、日本における民俗学や民族学のなかで、その先達である柳田国男先生以来、数多くの研究者たちにより発せられた設問であり、また論議が重ねられて来た。とはいっても、この内容は、近年に至るまで、それほど明確になったわけではなかった。ただいえることは、先人たちは日本文化の基層には稲作文化があり、その水脈をたどってゆくと、弥生文化にゆき着くと主張した。

それに対し、佐々木教授は、水田稲作が日本文化の主要に基層となしている第一類型の文化であることは認めながらも、雑穀・イモを中心とした畑作が第二類型の文化として、その基層に存在していると指摘する。この点では、日本文化を、同系・同種の単一文化とする従来の考え方に異論をとなえた故坪井洋文教授と、意見を同じくしている。

とはいっても、佐々木教授の論は、従来の研究が、稲作文化を構成する諸要素や、それが成立する諸条件が不明確な点をさらに、克服しようとしている点は目新しい。しかも、従来の論が、日本列島という枠組みのなかから解明しようとした立場が支配的であったのに対し、その視界は、すでに海の彼方にまで及んでいる。26ページに示されているように、稲作文化の構成要素の起源を、日本列島だけ

ではなく、東南アジアからインド大陸へと求めている。

この研究は、基本的には、E. Hahn, E. Werth, N. I. Vavilov, C. O. Sauer などに代表される、農耕・牧畜の類型、起源、技術に関する伝統的な接近方法を踏襲するだけではない。すぐれて、K. A. Wittfogel や J. H. Steward などが展開した水力社会 (hydraulic society) の理論を援用して、水田稲作社会の上に成立する王権や国家の形勢に関するメカニズムによって踏み込んでいることは、従来の稲作文化論とは、趣を異にしている。

以上のように、佐々木教授は、“稲作文化とは何か”という、伝統的な民族学や民俗学のテーマに、文化人類学、地理学、考古学、農学など、隣接科学の成果を大胆に取り入れることによって、深みを増している点は、同教授のこの道における年季を感じさせるものである。

いずれにせよ、この論文で感心させられるのは、限られた紙面を生かすために、図表が要領よく利用されていることだ。たとえば日本文化の基層を形成している諸要素を、大胆に、“縄文文化より受け継いだもの”、“弥生文化独自のもの”、“大陸から伝わった技術・習俗”、“中国系の渡来品”、“朝鮮半島の渡来品”などに分類し、図表化しているのは、読者や専門外の人たちには、たいへんに親切だと思う。

いずれにせよ、“稲作文化とは何か”というような設問に対して、従来の研究では、どちらかという形容詞を多用するような“人文学”的解答が多かったように思われる。それに対して、佐々木教授は、それを一歩前進させ、より具体的に解答を模索し

ている。たとえば、稲作の起源を、湿性ミレット栽培と関係づけて考え、陸稲と水稲が未分化状態の栽培植物に、その出自を求めている仮説などは、従来の稲作文化論にはあまりなかった見解であり、農学など自然科学への接点を提供されている。

願わくは、佐々木教授のこのようなパイオニア・ワークを、若い自然科学者たちが引き継ぎ、DNA 分析に代表されるような近年の遺伝学や農学の成果を加味することにより、“稲作文化とは何か”という、日本人にとって古く新しいテーマへの接近に、別の角度からのライトをさらに当てて欲しいものである。

なおさらに、希望を申し述べるのが許されるならば、佐々木教授の専門が日本を中心とする東アジアと、南アジアであるので、この論文では、東南アジアの稲作文化に割かれた部分があり多くなかったと思う。つぎの機会には、この面の論を、いっそう展開して欲しいと思う。

つぎに、チベット・ヒマラヤ研究に関する諸論文について、簡単に言及することにしてしよう。第三章の松原正毅教授の論文“チベットの牧畜”は、チベット本土の青海省ゴロク (果洛) 族自治州、揚子江源流にあたる同省の西藏自治区那農地区と阿里地区の三カ所において、調査研究がおこなわれている。この種の研究の多くが、これまではネパール・ヒマラヤ奥地のチベット系住民の間で、細々と続けられてきたことを考えると、チベット本土の三カ所でおこなわれた研究の学問的意義は大きいといえよう。しかも、ヤクの家畜化、すなわちチベットの牧畜成立に接近しようという野心的試みは、注目に値いしよう。

また、栗田靖之教授の「ブータンにおける農業と牧畜」では、通常フィールド・ワークをおこなうことがきわめて困難な東ヒマラヤのこの王国における“民族構成”、“服装”、“米作”、“ソバ”、“ミタン牛飼育”、“乳製品”、“料理”、“バターの変わった利用法”、“文化的影響”などが紹介されている。評者などは、1959年に出版された故中尾佐助先生の「秘境ブータン」（毎日新聞社）に胸ときめかした世代だけに、“禁断”のヒマラヤ王国のこの種の研究がさらに発展し、単行本になって、一般に提供されることを祈ってやまない。

さらに、ネパール・ヒマラヤに関する二研究に言及しよう。その一つは、第四章の坪内英彦助教授による「西北ネパールの木器」であり、いま一つは、第五章の小林茂教授による「ネパール・ヒマラヤのコモン・フィールド・システム」である。

ネパール・ヒマラヤの研究は、1950年代までのエクスペディションに付随した学術探検の時代から、1960年代のコミュニティー・スタディーの時代を経て、これらの論文の筆者たちのような“木器”とか“コモン・フィールド・システム”といった特定のテーマに焦点をあてる研究の時代に発展してきた。その意味では、評者などがヒマラヤを論じるのに、もっぱら“形容詞”を乱用していたのに対し、記述は詳細になり、分析はより科学的になったといえよう。たとえば、“木器”についての記述においては、その横断面の実測はもちろんのこと、X線照射による分析もおこなわれている。また、“コモン・フィールド・システム”の研究においては、一つのコミュニティーの研究に留ることなく、ネパー

ル・ヒマラヤにおける東西の比較をもおこなっている。しかも、その分析過程においては、アンデスにおける事例とも比較するという研究の拡がりを見せている。

このような事実は、他の論文においても枚挙に暇ない。いずれにせよ、この本により、戦後、細々とスタートした海外調査が、地理的に広汎な拡がりを見せている姿を表わしているだけではなく、内容的にも重厚さを増している様子が、十分に伺い知ることができる。その意味で、この種の研究に、中心的な役割を果たしてきた国立民族学博物館の新館長として就任された佐々木教授への<sup>はなむけ</sup> 餞の出版物としては、きわめて格好な成果といえよう。

最後に、筆を置くにあたり、本書に対して、二の希望を述べさせてもらうことにする。その第一は、共同研究の論議の過程では、それぞれの研究を横につなぐ討論がおこなわれたことであろう。しかしながら、本書が論文集という形態をとったために、それらの学術的な討論が、本書の中に十分盛り込まれていない。従って、別の機会に、本書のすぐれた研究成果のうえに世界の農耕技術、牧畜文化についての総括論を展開してもらい、一冊の書物として出版してもらいたいものである。また第二の希望として、すでに佐々木教授の巻頭論文に対するコメントのところでも述べたように、本書の諸論文が提起しているいろいろな学問的課題をそのままにしておくだけではなく、より若い世代の研究者の方々がこれらを継承し、わが国におけるフィールド・サイエンスの伝統を、さらに発展させ、論議の内容を精緻化させることを祈ってやまない。

(1993年、集英社、18,000円)